

『願いの街』 - 雨森あやめ

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

手を離れた剣が、からんと音を立てる。一度倒れ込むと、もう足は動いてくれなかった。たとえ動いたとしても、剣を拾って立ち上がる意味が、もはや感じられない。

気温はさして低くないはずなのに、寒くてたまらなかった。がたがたと震える身体を丸めて、膝を抱える。遠い昔の母の温もりが、急に思い起こされた。懐かしい記憶。意識がだんだんともうろう朦朧として、ふっと消えそうになる。

眠ったら死ぬ。そう自分に言い聞かせながら、必死にまぶたを上げる。白い小月に照らされた、血まみれの左手が見えた。手の平に巻いた布が、いつのまにか赤く染まっている。手でよかった、と矢が刺さったときは思っていた。けれど、こんなことなら、頭にでも当たっていた方がよかった。俺が死ぬば、長を失った街はすぐさま降伏しただろう。俺が逃げ延びたから、街は戦い続けるしかなくなってしまった。そのせいで、一体何人が無駄死にしたことか。

そもそも相手が悪すぎたのだ。こちらはまだ一度も神を持ったことのない新興の街で、敵は歴史の長い古街だった。あの必死さからすると、おそらく神が死にかけていたのだろう。勝算なんてあるはずがなかった。それなのに、親父は——街長は、戦うことを決めたのだ。

けれど、だからこそ俺は、諦めるわけにはいかない。萎えかけた意志が、僅かに熱を取り戻す。

遙か彼方に見える地平線には、相変わらず何の影もない。街さえ見えれば、なんとかそこに辿り着いて、生き延びてみせるのに。

今動いている街はどのくらいあるのだろう。それが今ちょうどここを通りかかる確率はどれほどなのか。限りなく低いに違いないが、探さずにはいられない。俺はここで死ぬわけにはいかないのだ。生き残りを集めて、いつか必ず街を奪還する。それはきっと、俺にしかできないことだ。街長の一人息子の、俺にしか。おそらく、親父はもう死んでいるだろう。

俺は、まだ死ぬない。死にたくない。

「誰か……」

頬を伝う涙が温かい。これほど強く何かを願ったのは初めてだった。誰でもいいから助けてほしい。しかしそれとは対照的に、諦めが心を支配していく。きっともう駄目なんだろう。もう、無理だ。身体は動かないし、眠くて仕方がない。助けなど来ないのだ。ゆっくりと、視界が黒に覆われていく。

と、不意に瞼の向こうが青く染まった。光を感じる。思わず、目を見開いた。何事だろう。

青く輝く街が、そこにあった。

まばゆさに、目が眩む。

さっきまでは何もなかったその場所に、街が現れていた。立ち上がって十歩進めば手が届くほどの位置。背の高い青い街灯が、俺を見下ろしている。格子状の柵の間に、白い壁が見えた。上方の窓から明るい光が漏れている。民家か何かなのだろう。さらに視線を上げると、真っ白な巨樹のようなものがそび聳え立っていた。これも窓があるので、建物らしい。物見の塔だろうか。しかし、俺の街にあったものよりも遙かに高い。建物自体もほのかに光を発している。知らない素材で造られているようだ。

目の前の光景を一通り眺めたあと、俺は苦笑した。ついに幻まで見えてきたのか。いくら神の力で街が動くといっても、地平線に見えてから門を叩けるようになるまで、少なくとも四半刻はかかる。だから、この青い街は俺の頭が創り出した幻なのだ。でも、これが最期に見る景色だというのなら、悪くない。こんなに美しいものを、俺は今まで見たことがなかった。出来て間もない俺の街は貧しくて、夜の明かりもろくに灯せなかった。だからだろうか、こんなものを見るのは。

そんなことを考えながら、しかし俺は、立ち上がろうとしていた。どれだけ目を凝らしても、幻の街は消えようとしなない。それどころか、いくらか冴えた目に、くっきりと映って輝きを増している。見れば見るほど、俺の中のこの街が、現実近づいていくとでも言うように。

半ば這うように進むと、門がはっきりと見えた。そこだけ照明が少なく薄暗い。そしてその傍に、門番らしき人影が立っていた。生真面目そうにぴんと背筋を伸ばして、帽子の下から覗く金髪を風に揺らしている。ふと、傍らに剣が落ちていることに気がついた。生きるためには、まだまだ必要なものだ。柄に手の平を置き、指に力を入れる。そうして作業的に動作をこなすと、意外と簡単に、再び剣を握ることができた。それを杖代わりにしてようやく、しっかりと立ち上がる。希望が生まれたせいか、少し力が戻ってきたようだ。もう、この光景を幻だとは思えない。

「あの……」

力を振り絞って出した声は掠れていたが、相手には届いたらしい。門番は緩慢な動作でこちらを振り向いた。目深にかぶった帽子の下から、視線を感じる。

「口ウ、といいます。この街に、入れてもらえませんか。困っているんです」

普通に考えれば、拒否されるに決まっている。金を払えるような風体には見えないだろう。何より、こんなどう見ても訳ありの人間を街に入れても、厄介事を招くだけだ。それでも、門を開けてもらえるまで、退くわけにはいかなかった。最悪、こいつを脅してでも、俺は中に入って生き延びなければならぬ。

そんな殺気立った気配に気づいていないかのように、門番は俺に歩み寄ってきた。

「歓迎しよう」

想像以上に若い声だった。多分、俺とそう変わらない。よく見れば、随分ときゃしゃ華奢なたく体軀をしている。街の門番は荒事に慣れたたくま逞しい男の仕事だと思っていたが、どうやら街によって違ったらしい。しかしそんなことは、今はどうでもいい。なぜかはわからないが、俺は拒絶されなかった。

細い腕が巨大なかんぬき門を外す。重々しい音を立てながら、街への道が開かれていく。青い光に照らされた、細い道。

「ようこそ、願いの街へ」

門番の青年はにこやかに言う。その笑顔が、なぜか悲しんでいるように見えた。

あまりの呆気なさに、俺は立ち尽くしたまま動けなかった。審査も金もなしに、なぜ怪しい浮浪者を街に入れる？ 不用心にも程がある。こんなことをしては、街は犯罪者で溢れ返ってしまう。

だが今の俺には、他の街を心配している余裕はない。訳がわからなくても、ここはこの街の寛容さに感謝して、素直に進むべきだ。

門番に軽く頭を下げてから、俺は踏み出した。上半身が揺れて倒れそうになりながらも、ゆっくりと歩いていく。そこは細道で、両脇には民家らしき建物が立ち並んでいた。地面は白く舗装されて、家なしの人々どころか塵一つ落ちていない。ずっと先に、大きな街灯が見えた。あそこまで行けば、誰かがいるかもしれない。途中からは民家の壁に寄りかかりながら、俺は青い光を目指した。

不意に手をついていた壁が消えて、気がつくまで横たわっていた。身体の下に柔らかい地面がある。いつのまにか細道を抜けて、広場のような場所に出ていた。青い街灯が円形に立ち並び、その下には光り草の植え込みがある。中央に大きな噴水があって、子供たちが遊んでいるのが見えた。その傍で、母親たちが談笑している。穏やかな光景だった。貧しかった俺の街のことを思い出す。男も女もみんなあくせく働いて、けれど忙しい日々の中のひとときに、それは確かに存在したのだ。

乾いた涙の跡を、再び雫がなぞった。みんな殺されてしまった。俺が死ななかつたがために。

初めて、このまま死んでもいいと思った。俺だけがここで生きていて、何の意味があるだろう。生き残った民たちも、きっと俺を恨んでいるに違いない。この動く街にいればいるほど、俺は故郷から遠ざかる。生き延びたとしても戻れる保障がないので、俺は自分だけ安全な場所に逃げ込んだ卑怯者でしかないのだ。

ぼやけた視界に、こちらに近づいてくる影が映った。

「大丈夫ですか？」

声が降ってくる。駆け寄ってくる、複数の足音。

「怪我が」

「外から来たのか、可哀想に」

「早く手当てを」

優しい言葉に、痛みが和らいでいく気がした。身体が重い。眠りの波に吞まれて、俺の意識は急速に沈んでいった。

ぼんやりと光を感じて、俺は瞼を上げた。白い天井が見える。

ここはどこだろう、と思った。俺の部屋ではない。どこかで倒れたことは覚えているが、こんなに白い建物が街にあっただろうか。なんだか全身が温かい。身体を動かすのが億劫だが、とりあえず起き上がらなければ。今日は朝から予定が詰まっていたはず――

「あ！ 気がついたの？」

突然近くで甲高い声が聞こえた。視線を動かす。寝台の傍に、小さな少年が立っていた。八歳くらいだろうか。少しはねた、茶色い髪をしている。

「大丈夫？」

そう言ってこちらを覗き込んでくる。この子は誰だろう。全く見覚えがない。着ている服は上等そうだから、上流家庭の子なのだろう。だとしたら、俺と面識があってもおかしくないはずなのだが。

黙ったままの俺を見て心配になったのか、少年は小走りでお母さん、と呼びながらどこかに駆けていった。

「ありがとうございました。おかげで助かりました」

俺は深々と頭を下げた。前に座った長い金髪の女性がにこりと微笑む。

彼女の話によると、俺はこの数日間眠り続けていたらしい。倒れた俺に最初に気づいてくれたのが、このミラさんだったという。俺を自分の家に運んで、今まで介抱してくれていたそうだ。赤の他人だというのに、なんと親切な人なのだろう。いくら感謝しても足りない。

目が覚めたとき傍にいたのは、ミラさんの一人息子で、名をフィルという。まだ出会ったばかりだが、明るくて屈託のない性格なのが見てとれた。

ふと、視線を部屋の中に向けてみる。さほど広くはないが、綺麗に片付けられた部屋だ。壁や天井は見たことのない素材だが、基本的な作りは俺の部屋と変わらない。

「ところで、ここはどこですか？ 俺は、仕事に戻らないといけませんが」

俺が発した疑問に、二人は瞬きをしたかと思うと、顔を見合わせた。

ミラさんが、困惑の表情を浮かべながら口を開く。

「覚えていないの？」

そう言われても、なんだか頭がぼんやりとして、倒れる前のことはうまく思い出せなかった。なぜ、俺は広場なんか倒れていたのだろうか。

フィルが無言で、俺の左手に触れた。見ると、ぐるぐると包帯が巻いてある。俺は、怪我をしていたのか？

それ、とフィルは言った。先程よりいくらか静かな口調で。

「その手、血だらけだったんだよ。傷がひどくて、大変だったんだって」

「傷？」

呟いた瞬間、ずきりと頭が痛んだ。

――悲鳴と、怒号。剣と、矢と、倒れた人々。前を走っていた男が不意に地面に転がる。そのうなじに、矢が刺さっているのが見える。けれど、立ち止まる余裕はない。置き去りにして、街の外へと走り続ける。飛来した矢が、左手を貫いた。

あ、と声が出た。

記憶が水のように溢れ出して渦を巻く。部屋の風景が歪んで、視界が赤く染まる。

と同時に、激しい頭痛が襲ってきた。頭の中で何かが暴れている。それは痛みというより苦しみに近かった。どこからか叫び声が聞こえる。何と言っているのだろう。ひどいめまい眩暈がした。意識が遠のきそうになる。

あの街はどうなった。俺の街の、民たちは。大勢が死んだ。戦いに向かわせた兵たちも、俺を守ってくれた友人や部下たちも、みんな殺された。けれど、まだ残っているはずだ。俺と同じように生き延びた人々が。俺は戻らなければならない。こんなところで寝ている場合ではない。生き残りを探して、街を取り戻す。そのために、俺は生きているのだ。そのために――

「ロウ？」

幼い声が聞こえて、俺ははっとした。それをフィルの声だと認識するまでに、少し時間がかかった。この子は俺の街の子ではない。ここは俺が辿り着いた、別の街。青い街を見たのを覚えている。あの幻のような街は、やはり幻ではなかったのだ。現にこうして、俺がここに生きているのだから。

「大丈夫？」

いつのまにか頭痛は止み、叫び声も聞こえなくなっていた。目の前の二人の顔も、ちゃんと見える。

左手を眺める。この包帯の下には傷があるという。そう理解しても、もうあの苦しみはやってこなかった。あれは何だったのだろう。夢でも見ていた気分だ。赤い、悪夢。

「どうかしたの？」

ミラさんに訊かれて、俺は首を振った。あれはきっと俺の記憶なのだろう。もしかすると、俺自身が忘れようとしていたのかもかもしれない。その証拠に、既に記憶が薄れつつある。悪夢の中で俺が何を考えていたのか、もうよく思い出せない。

まあいいか、と俺は思った。今はとにかく、休むべきだ。考えるのはあとでいい。

小月が沈もうとしている。意識が戻ったので、俺は共同家屋に移ることになった。俺の街では共同家屋といえば罪人が詰め込まれるところか、家をなくした貧しい人々が住む最低限の生活拠点といった場所だったが、この街のそれは違いうらしい。想像以上に綺麗で大きな建物を見ながら、俺はそれを実感していた。二階建てで各階に五つずつ部屋を持つ棟が、いくつも並んでいる。壁の白さは他の家には劣るが、一部屋の広さは俺一人では持て余すほどだ。そもそも一人に一つ部屋があるという時点で、この街の豊かさがわかる。

「ありがとうな、わざわざついてきてくれて」

礼を言うと、フィルは得意気に胸を張った。

「いいよいよ！ それより、傷はもう平気なの？」

「ああ、もう平気だ」

元々それほど大した傷はなかった。一番ひどかったという左手も、薬のおかげで痛みはない。完治にはまだ時間がかかるらしいが、日常生活には支障はなさそうだ。

この街はいいところだ。目覚めてからまだ一日も経っていないが、見るだけでわかる。建ち並ぶ家々も、整備された道も、街が発展している証拠だ。何も無い状態からここまでくるのに、一体何百年かかったのだろう。

考え込んでいると、服の袖が引っ張られるのを感じた。フィルが、うずうずした様子でこちらを見ている。

「何だ？ 俺はもう一人で大丈夫だから、帰ればいーだろう」

そう言うと、フィルは拗ねたような顔をした。何か言いたいことがあるらしい。俺は屈んで、フィルと視線を合わせた。丸い茶色の瞳が俺を映している。

「何か用か？」

「ロウは、まだこの街のこと、なんにも知らないでしょ？」

「それがどうしたんだ？」

言うか言うまいか迷っているようだ。先を促すと、フィルは思い切ったように口を開いた。

「もしロウの怪我がもういいんだったら、ぼく、ロウに街を案内するよ！」

なんだ、そんなことか。拍子抜けして、俺はすぐに頷いていた。きっと、この子は自分の街を紹介したくてたまらなかったのだろう。俺の街でも、子供たちは来訪者に群がっていた。フィルは俺の怪我をおもんばか慮って、抑えてくれていたのだ。

「ほんと？　じゃあ、明日の朝、迎えに行くね！」

フィルは嬉しそうに笑って、自分の家へと帰っていった。何度もこちらを振り返ってはまた駆け出す姿が、子供らしくて微笑ましい。俺にもし弟がいたら、あんな感じだったのだろうか。そんなことを思ってしまうほどだった。

フィルの背中が見えなくなる。黄色い大月が昇り始めた。人の姿もほとんどない。元々この辺りは人通りの少ない場所らしい。静寂に包まれた路地を、俺は妙に落ち着かない気分で眺めていた。

どれくらいぼうっとしていたのだろうか。不意に肩を叩かれて、俺は振り返った。しかし、その先には誰もいない。共同家屋が見えるだけだ。と、視界の端に明かりが見えた。あれは確か、俺の泊まる建物の隣の棟だ。二階の角の部屋の窓に、人影が見える。少女だろうか。窓枠に肘を乗せて、どこか遠くを眺めている。その首元で、きらりと何かが光った。来て、と呼ばれたような気がした。

扉を叩くと、少しの間をおいて、どうぞという返事が聞こえた。少し掠れた、高い声。

そっと、中を覗き見る。声の主は、部屋の一番奥に置かれた寝台の上で、まだ窓の外を見ていた。伸び放題といった風の長い黒髪が、腰まで流れている。

部屋に足を踏み入れて、扉を閉める。そして寝台を振り返った途端、その少女と目が合った。

その瞳は、遠い昔に絵画で見た海に似ていた。どこまでも深くて、吸い込まれそうな色。射抜かれたように、俺はしばらくその目から視線を逸らすことができなかった。

「誰？」

少し棘のある口調。その少女は寝台に腰掛けて、じろじろと俺を見ていた。飾り気のない黒い衣の胸元に、不思議な色をした首飾りが光っている。どうやら、呼ばれたと思ったのは気のせいだったようだ。

「最近来た人？」

「……そうだが」

なぜわかったのだろう。

俺の胸の内を読んだように、少女はやっぱり、と呟いた。

「なんだか、雰囲気が違うから」

そういう少女も、他の人たちとは違った空気をまと纏っている。どこか刺々しくて、近寄りがたい。しかしそれは、敵意というよりは怯えのように感じた。例えるなら、傷ついて動けない獣の虚勢のような。

歳は十かそこらに見える。そんな幼い子供が、なぜこんな場所に一人でいるのだろう。この街の共同家屋は、来訪者の泊まる場所だと聞いた。だとすると、この子も外から来たことになる。一体何があったのだろうか。

そんなことを考えていて、ふと思い出した。そういえば、まだ名乗っていない。

「俺はロウ。数日前にこの街に来たんだ。今日から隣の棟に住むことになっている。よろしく」

軽く頭を下げると、少女はふいと視線を逸らした。

「エルダ」

ぼつりと言ったそれが、彼女の名前らしい。

それからエルダはしばらく黙っていたかと思うと、小さく口を開いた。

「その左手、どうしたの？」

その視線は、俺の包帯を巻かれた左手に向けられている。ああこれは、となぜだか自然に笑みがこぼれた。笑うようなことではないのに。

「この街に来る前、矢で射られてしまって」

偶然だった。逃げようとした俺たちは敵軍に見つかって、矢を射かけられた。大量に放たれたそれらのうちの一本が、左手に命中したのだ。本当に、あのとき死んでいればよかった。

エルダは首を傾げた。

「何か、悪いことをしたの？」

その言葉には苦笑せざるをえなかった。そうか、この子は戦を知らないのだ。矢で狙われるなどということは、罪人にしかありえないと思っている。きっと平和な街で、平和に生きてきたのだろう。

そうじゃない、と俺はできるだけ柔らかく言う。

「俺の街は、戦を仕掛けられたんだ」

エルダは目を見開いた。予想だにしていなかった、という顔だ。

「神を持った街がやってきて、俺の街を滅ぼした。俺はその生き残りなんだ。街を取り戻すために荒野をさまよ彷徨っているときに、この街に拾われた」

話し出すと止まらなかった。きっと俺は、誰かに話したかったのだ。ミラさんやフィルにこれ以上心配をかけるわけにはいかない。だから今、この少女に話している。突然こんな身の上話をして、嫌われても仕方がないな、と思う。それでも、俺は誰かに聞いてほしかった。

「俺か親父のどちらかが街の外まで逃げ延びれば、再興の余地はある。俺は、俺が残るべきだと言ったんだ。俺はまだ若造で、逃げながらみんなをまとめることなんて、できるわけがない。でも、親父は決して首を縦には振らなかった」

お前の方が若いから、と親父は言った。けれど、そんなわけがない。みんなが尊敬していたのは親父だった。俺にあるのは時間だけで、才能も人望もない。それは、親父だって重々承知していたはずだ。それなのに。

「どうしてだったんだろうな……」

俺が生き延びたって、意味がない。俺を逃がしてくれた部下たちだって、親父の命令に従っただけだ。そして結局、俺をかばって死んでしまった。俺は、守られていただけだった。

「ふうん」

それだけ言って、エルダはまた押し黙った。何か考え事をしているようだ。俺もどう返せばいいのかわからないまま、時間だけが過ぎていく。窓の外は既に暗くなっていた。

俺は気まずさを感じていた。やめておけばよかったと、早くも思い始める。

やがて、エルダは顔を上げた。また、目が合う。吸い込まれる。

「まだ、つらい？」

発せられたのは、そんな問いだった。

「少しだけ」

俺はそう答えた。実のところ、もう辛くはない。過去の記憶は既に風化して、ただの情報と化している。あの街で起きたことが、自分の身に降りかかったこととは思えないくらいに。ただ生き残ったことへの罪悪感だけが、痛いほど胸に突き刺さっていた。

エルダは窓の外へ目をやった。つられて俺も外を見やる。青い街灯に照らされて、あの門がぼんやりと浮かび上がっている。門番も相変わらずその傍に立っているようだった。

「わたしはね、一年前にここに来てから、ずっと外に出ていないの」

エルダが言う。その声は、少し哀愁を帯びていた。

「病気なのか？」

そう訊くと、首を振る。しかし、それほど健康そうにも見えない。肌の色は蒼白に近く、ほっそりとした顔や手足は美しいというよりも痩せこけている。

「わたし、今日はもう眠るね」

その言葉で、俺は追い払われようとしているのだと悟った。

「ああ、すまない。じゃあ、俺はこれで」

荷物——ミラさんが保管してくれていた剣だけだが——を抱えて、出て行こうとする俺の背中に、声がかかる。

「……また、来る？」

寂しそうな声に、思わず振り返る。エルダはなぜか緊張した面持ちで、俺を見つめていた。嫌われたのではないのか？

「ああ」

不思議に思いながらもそう答えると、ぱあっと笑顔になる。

「ほんと？ほんとに？」

急に声音が変わったので、俺は面食らった。けれど、どうやら元気になってもらえたようだ。きっと、ここにはあまり人が来ないのだろう。話し相手になるだけでこの子が喜ぶのなら、何度でも来よう。そう思った。

「こっちだよロウ！ こっち！」

元気に俺の手を引くフィルに苦笑しながら、俺は街の中を歩いていた。そう寒くはないというのに、フィルの手はひんやりと冷たい。

驚くべきことに、この街には物見塔が存在していなかった。通常、街には外敵をいち早く発見するために、隅に塔が置かれている。しかしここにはそれが無い。だというのに、襲撃を受けたことは一度もないそうだ。そもそもこの街の人々は、武器や防具を一切所持していないらしい。畑を内包しているおかげで他の街から物資を奪う必要がなく、完全に自給自足の生活を送っている。神がいると育たないはずの作物は、しかしここでは全員の食事を賄えるほどよく採れるという。この街の神は特殊なのだろう。もしすべての街がこうであったなら、と思わずにはいられない。もしそうなら、どれだけの悲劇が、起こらずに済んだだろう。

考え込みながら歩いていると、広場に出た。俺の街に比べて、この街はずっと広い。大きな四角の形をしていて、四隅と門の近くには広場がある。俺が最初に目にしたのも、その一つだ。主要施設は中心部に集まっているため、広場の傍には民家が多い。子供たちが駆け回って遊ぶ中、俺も子供のようにきょろきょろと周囲を見回しながら歩いた。

各広場から伸びる道は、中心部へとつながっている。人通りが多く、脇には野菜や菓子を売る屋台がずらりと並んでいた。そのけんそう喧騒を広場から眺めていると、不意に後ろから肩を叩かれた。振り返ると、白髪の老人が俺を見ていた。

「君は、この前倒れた子か？」

見覚えはない。しかし、あちらは俺を見たことがあるようだ。とすると、おそらくは倒れたときに傍にいた人なのだろう。俺は頷いた。

「やはりそうか。もう元気になったのか？」

老人は俺の隣に立った。よく見ればがっしりとした体つきをしているし、背筋もそう曲がっていない。若い頃は偉丈夫だったのだろう。

「はい、もう大丈夫です」

笑顔を作ってそう答えると、老人は俺の目をじっと見つめた。問いかけるような視線。無意識のうちに、左手に触れていた。それを見て、老人はためいき溜息をつく。

「君がなぜこの街に来たのか、私は知らないがね。ここに来る者はみんな、何かしらの悲劇を経験してきているんだ」

唐突に話し始めた意図がわからず、俺は首を傾げた。ただ、この老人は何か重要なことを言おうとしている気がする。

「私は——自分の街を壊されて、ここに逃げてきたんだ」

鼓動が早まるのが、自分でもわかった。一気に体が強張って、うまく表情を作れなくなる。

「私の住んでいた街は弱くて神もまだいなかったから、あつという間に制圧されてしまった。私は運よく逃げ出したところを、この街に拾われたんだ」

それは、今の俺の境遇に酷似していた。神の街に滅ぼされるなどという悲劇はありふれているが、こうして実際に生き残り同士が出会うことは稀だろう。嬉しいとも悲

しいとも言いがたい、不思議な感覚だった。そんな俺の様子に気づいているのかいな
いのか、老人は話を続ける。

「あれからもう四十年が経った。自分だけが生き残ってよかったのかどうかは、今でもわからない。ただ一つ言えるとするれば——泣きたいときは、泣いた方がいい。涙は
悲しみを流してくれる。痩せ我慢して一人で溜め込んでいても辛いだけだ」

自分が生き残ってよかったのかどうか。それは、俺も何度も考えたことだ。だから
老人の言葉は深く、俺の心に染み渡った。結局、そんなことは誰にもわからない。わ
かるはずがないのだ。その答えを知っている人たちは、もう死んでしまったのだから。
心に刺さった棘が一つ一つ抜け落ちていくような気がする。

「一番いけないのは、死者に引きずられることだ。死んだ者は、もう戻ってはこ
ない。彼らに報いようと思うのなら、立ち止まらず、前を向いて生きていけ。それが、
乗り越えるということだ」

死んでいった仲間たちの中には、幼い頃からの親友もいた。ずっと世話をしてくれ
ていた側近もいた。そうだ。彼らの死を、俺はまだ引きずっている。乗り越えられそ
うにない。だが俺がそうしていることを、彼らは望むだろうか。

「……ありがとうございます」

街のことを思い出しても、涙は出ない。けれど、今はまだ無理でも、少しずつ立ち
上がればいい。老人は俺に、それを悟らせてくれようとしたのだ。手を差し伸べられ
た気分だった。自分も辛い体験をしたというのに、まだうずくまっている俺を救おう
としてくれている。その優しさがひしひしと伝わってきて、なんだか体がむずがゆ
痒かった。

「ロウ！ 探したよ！」

フィルが駆けてくるのが見えた。俺が立ち止まったのに気づかず、先に行ってしまう
っていたようだ。申し訳なく思いながらも、俺はあることを思い出した。

「そうだ、フィル。エルダって子のこと知ってるか？」

エルダが外から来たのであれば、この門前の広場を通ったはずだ。近くに住むフィ
ルなら、知っていてもおかしくない。直接は知らなくても、噂くらいなら聞いたこと
があるはずだ。この街の人たちの性質からして、閉じこもっている少女を放っておく
わけがない。

しかし予想に反して、フィルは答えなかった。その表情はまるで、怯えているかの
ようだった。

なぜ、フィルが怯えるのだろうか？ 理由がわからない。けれど、これ以上訊いては
いけない気がした。

ごめんな、と俺はフィルの肩に手を乗せた。

「今は忘れてくれ。さ、向こうに行こうか」

うん、と頷くフィルは、少し元気を取り戻したようだ。俺の手を握ると、普段より
大きくぶんぶんと振りながら歩き出した。

広場を離れて中心部への道を歩いていると、否応なしに目に入るものがある。

それは、街の中央に一際高く聳え立つ樹だった。いや、あれは樹ではない。それを
模して造られた建物だ。透きとおるような壁に青い街灯の光が反射して、空まで照ら
しているように見える。

「……もしかして、あれが神殿なのか？」

神殿は神の力の象徴であり、街の始まりの証でもある。新しい街を作るとき、最初
に建てるのがこれだ。いつ神が生まれてもいいように、ということもあるが、高い建
物を造ることで、他の街に存在を知らせる意味もある。

「そうだよ。行ってみる？」

フィルにそう訊ねられたので、俺は頷いた。この街の発展の源となっている神。他
の街の神とは一線を画しているように思える。それがおわす神殿を、間近で見ても
かかった。

樹のふもと麓に辿り着く。天辺が見えないほど、その神殿は高かった。うねりながら空へと伸びている様は、本当に樹のように見える。根元の方は光り草に覆われ、白く小さな花が咲いている。夜になれば、さぞかし美しく輝くのだろう。

そして俺は、一つの疑問を抱いていた。

「なぜ、扉がないんだ？」

目の前の神殿には、人ひとりが通れるほどの穴が開いている。おそらくこれが入り口なのだろう。しかし、それを塞ぐための扉がどこにも見当たらなかった。

へ、とフィルはきょとんとして首を傾げた。そんなことは考えたことがなかったとも言えるように。

「扉がないと、変なの？」

こちらこそ、なぜそんなことを訊かれるのかわからなかった。神殿の扉は、固く閉ざされていなければならない。神は信じるべきではあるが信用するべきではない。神にだっておそらく自我はあるのだ。もし街の外に出てしまったら、取り返しがつかなくなる。神がいなくなれば、街は文字どおり崩壊してしまうのだ。過去に何度か、そういう事例があったと聞いたことがある。

「神様はずっと神殿にいるんだもん。扉なんていらないでしょ？」

不思議そうに言うフィルは、神が逃げるなどとはみじん微塵も思っていないらしい。

神殿の入り口の前に立つ。見張りの兵さえいない。侵攻される恐れがないから兵は必要ないのだろうが、これでは誰が出入りしてもわからないではないか。

中を覗き込む。青い光に照らされた白い部屋。天井はどこまでも高く、空を思わせる。中央には祭壇が置かれ、その上には真新しい供物がある。

しかし、そこには誰もいなかった。誰かが住んでいる形跡さえ、見当たらない。

ここに神がいるなら、俺には見えてもおかしくないはずだ。神は、街の住民の目には映らない。しかし俺は、数日前にこの街に来たばかりだ。まだ住民とはいえない。

「お前は、神を見たことがあるか？」

フィルに訊ねる。小さな頭が横に揺れた。

「ないよ。だって神様は、目に見えないでしょ？ お母さんが言ってたもん」

そんなはずはない。住民であっても、十ぐらいまでの子供には神が見える。書物にはそう書かれていた。だが、フィルを問い詰めても仕方のないことだろう。それに、これだけ大きな街なのだ。普通の街では考えられないようなことがあっても不思議ではない。俺はなんとか自分を納得させて、その奇妙な神殿をあとにした。

「出かけてたの？」

部屋に入るなり、エルダが訊ねた。フィルと別れて帰ってきた俺は、約束どおり、エルダの部屋を訪れていた。

いきなりの質問に面食らう。それに、なんだか不機嫌そうな声だ。

「フィルに——街の子に、案内してもらっていたんだ」

「ふうん……」

答えると、エルダは俯いてしまった。何かまずいことを言っただろうか。それとももしかすると、寂しかったのかもしれない。

「エルダは、外には出ないのか？」

病気ではないと昨日は言っていた。何か、他に理由があるのだろうか。

「……わたしは、出られないの。出ちゃいけない、から」

低い声でそう呟いたエルダは、ひどく思いつめた表情をしていた。答えになっていないが、問い質すことははばか憚られる。エルダは話したくないのだ。こんな小さな子が話せないほどの何かを抱えていることに、胸が痛くなった。

俺が何も言えないでいると、エルダは顔を上げて、取り繕うように少し笑った。

「あのね、わたしの街の話をしてもいい？」

助け舟を出された気分だ。勿論、と頷く。

しかしエルダの口から放たれたのは、気分転換には到底なりえない言葉だった。
「ヴィオはね、神様になったんだって」
神様になった。それは、子供相手に死をごまか誤魔化すときのあんゆ暗喩には聞こえなかった。エルダはきゅっと口を結んで、笑みを作ったままだ。
「ヴィオって？」

どちらにせよ、気軽に先を促していい話題ではない。俺は慎重に言葉を返した。エルダの表情からは、何を考えているのか読み取れない。しかし少し突けば一気に爆発するような、そんな危うさを秘めた雰囲気があった。

「わたしの双子の弟だよ。生まれてからずっと一緒にいたの。でも、二年前、街が動き出した」

やはりそちらの意味か。右手が、包帯に触れる。

人が住み始めてからある程度の時間が経過すると、街には神が生まれる。生まれるというより、住民の誰かが神になるといった方が正しい。それはたいてい十歳程度の子供なのだそう。そして神が生まれると、街は動き出す。その言葉のとおり、民の意志に従って、地面を滑るようにして進んでいくのだ。止まることはできない。

通常、街は周囲の土地を農地とする。この街が異常なだけで、普通は街が動き出せば、もうそこで作物を作ることはできない。たとえ内部に畑を作ったとしても、動く街では日照時間が不安定な上、土地は痩せていく一方だからだ。そのため食糧を手に入れるには、他の街と交渉するしかない。街に交換できる資源が残っていない場合は、戦という形になる。神の住まう街の約半分は、こうした略奪者だと言われている。

しかしすべての動く街は、最後には必ず略奪者となる。神となった人間は、何も食べなくても生きていられるし、病にもかからない。だが、寿命だけは厳然として存在するのだ。普通の人間よりは多少長いものの、およそ百年程度で、神は寿命を迎えて死ぬ。それと同時に、神の力で動かされていた街は支えを失って崩壊してしまう。建物も家具も道具も、生き物以外の物は何もかも、神の力の影響を受けている。そのすべてがなくなってしまうのだ。残った生身の人間だけでは、生きていくことはできない。

だから老いた神を持つ街は、移住の地を求めて躍起になる。自分たちが生き残るためには、他の街を襲って乗っ取るしかない。奪い取った土地で、彼らは再び街を発展させ、神を生み出す。そうしてまた、次なる地を探すのだ。新街と比べれば、古街の方が強いに決まっている。弱い新興の街は、その餌食にされるしかないのだ。そう、俺の街のように。

悔しさを噛み締めている間も、エルダの言葉は続いた。

「ヴィオは自分で言い出したの。僕が神なんだ、って。そうしたら役人たちが来て、ヴィオを神殿に連れて行っちゃった」

神となった人間は決して嘘をつかず、自ら申し出る。そうして、神は神殿に入るのだ。そしてその多くは、死ぬまで外に出ることはない。まるで罪人のようだ、と思う。それは街の発展のためには仕方ないことだが、突然家族を奪われた方は辛いだろう。今まで考えたこともなかった。神さえ生まれれば、みんな幸せになれるだろうと思っていた。神は様々な奇跡を街にもたらす。神がいる街では食べ物は腐らず、疫病も流行らない。住民が恩恵を受けるために、神は閉じ込められなければならないのだ。

「わたしは、訳がわからなかった。そしてどんどん、みんなにはヴィオが見えなくなっていった。みんながヴィオを忘れちゃうみたいで、怖かった。だからわたしは、ヴィオを助けに行こうとしたの」

いつのまにか、エルダの語調は強くなっている。その声の力強さに、俺は驚いた。俺は一人息子だったからわからないが、兄弟の存在というものはこんなにも大きいものなのだろうか。

「でもね、失敗しちゃった。それで、この街に拾われたの。わたしに残されたのは、この双子石だけ」

そう言って、エルダは胸元に提げた石を、両手で包むようにして握った。そういえ

ば、と俺は思う。初めてこの共同家屋に来たとき、この石が光ったように見えたのだ。

「それが、双子石？」

うん、とエルダは頷いた。その表情が、少し柔らかくなる。本物の笑顔に近づく。「わたしはもう十歳を超えてたから、神は見えないはずだったんだけど、わたしにはヴィオが見えていたの。それは多分、この石のおかげだと思う」

双子は非常に稀にしか生まれない。だから双子には、祝いとして双子石が贈られる。瓜二つの形に加工された双子の宝石。

これがそれか、と俺はエルダの手の中を覗き込んだ。別段綺麗な色はしていない。むしろどちらかというと濁ったような、地味な見た目をしている。けれど見るたびに異なる色を映し出す、不思議な石だった。エルダのそれは花の形をしているため、花弁の一枚一枚に、違う色が輝いているように見える。しかし、光るといふには程遠い。

「神殿に連れて行かれる前にね、ヴィオが言ってたんだ。この双子石が、わたしを守ってくれるんだって。すごく、すごくうれしかった。だからわたしはずっと、この石を持ってるの。これのおかげで、わたしはわたしでいられるの。この石に触っていると、ヴィオが隣にいるような気がするんだよ」

弟のことを語るエルダは本当に嬉しそうで、俺は温かい気持ちになった。本当に石ころ程度がそんな力を持つのかはわからない。けれど、エルダがそうだと言うならそうなのだろう。

それに、あながち嘘ともいえない。あのとき、俺は確かに誰かに呼ばれたのだ。この双子石が、俺たちを出会わせたのかもかもしれない。

「ねえ、ロウ」

ひとしきり話し終えたエルダは、急に声音を変えた。先程までとは打って変わって、気弱な様子になっている。

「わたしのこと、誰にも聞いてないの？」

それはまるで、悪事の発覚を恐れる子供のようなようだった。その不安げな声に、俺は首を傾げた。

「何かあるのか？」

「ううん」

否定しながらも、表情が肯定している。視線を泳がせながら、エルダは言った。

「ねえ……もし、誰かからわたしのことを聞いても、ロウはここに来てくれる？」

ずるい言い方だと思った。その話の内容を知らないのだから、判断のしようがない。そしてこの雰囲気では、断れるわけがない。けれど、

「ああ、勿論だ」

望んでいるであろう答えを返してやる。何にせよ、俺はこの子の傍を離れるつもりはなかった。この子の心の支えは、この街にはない。俺が守ってやらなければ。そんな気持ちが芽生えていた。

俺とエルダは、二人とも外からやってきた。俺の故郷もエルダの故郷も、ここにはない。違う場所から来て違う事情を抱えていながら、俺はエルダのことを同胞のように感じていた。俺たちは違うのだ、という感覚。それは、俺がまだ外への未練を捨て切れていない、ということなのかもしれないけれど。

「ありがとう……」

エルダは安堵した様子で息をついた。その手が、双子石をぎゅっと握りしめている。そういえば、と俺は口を開いた。

「エルダは、花が好きなのか？」

エルダがゆっくりと顔を上げた。双子石は花の形に加工されていた。ただそれだけの理由だが、なぜだかそう思えたのだ。

「うん、そうだよ」

よくわかったね、と微笑むエルダが、とても寂しそうに見えた。だから、俺は言う。

「花、持ってきてやろうか？」

よく見渡してみれば、この部屋には置物も絵画もなかった。俺の部屋にさえ花が置かれているというのに、ここには何も無い。おそらくエルダが外に出ていないのと、誰もここを訪れないせいだろう。

「いいの？」

エルダがおずおずと訊ねた。ああ、と頷いてやる。エルダが外に出ない理由はわからないが、花くらいならなんとかなるだろう。道端で摘んできてもいいが、それはなんだか違う気がする。ミラさんは、花屋を営んでいると言っていた。俺の街にそんなものはなかったが、おそらく贈り物用の花を売るところなのだろう。明日頼んでみよう、と俺は思った。

花屋に行く前に、俺は門前の広場に立ち寄ることにした。他に思いつかなかったからだ。あの老人は、今日もいるだろうか。彼なら、エルダのことを話してくれるかもしれない。エルダの名前を出したとき、フィルは怯えているようだった。きっと何かがあったのだ。だから、彼に頼ることにした。

目当ての人物は、すぐに見つかった。花壇の傍の長椅子に腰掛けている。

正面から歩み寄っていくと、老人は顔を上げてこちらに気づいた。会釈をして、隣に座らせてもらう。

「今日は、一人なのか」

「ちょっと訊きたいことがあって」

何だね、と訊ねる老人に、俺は思い切って言う。

「隣の棟に、エルダという子が住んでいるんですが、ご存知ですか」

エルダの名前を出した途端、明らかに表情が変わった。痛みを堪えるように目を細めて、既に俺を見ていない。

「教えてください。何があったんですか」

やはり何かある。俺は知らなければいけない。エルダはもう一年も部屋に閉じこもったままなのだ。その心を変えられるとしたら、それは俺しかない。そんな自負が、俺の中に生まれていた。語気を強めると、老人はやっと俺を見た。

「エルダ……あの子は、人を殺したんだ」

え、と声が漏れる。耳を疑った。人を――殺した？

エルダとの会話を思い出す。いつも穏やかで、弟のことになると柔らかい表情をしていたエルダ。人を殺すような人間には到底見えない。

「一年前の話だ」

エルダは一年前にここに来たと言っていた。だからこの人は確かにエルダの話をしているのだ。聞き間違いではない。そう理解して、俺は胸に痛みを感じた。そんな話など、聞きたくない。けれど、もう引き返せない。

「あの子は広場に辿り着くなり、気を失ってしまった。ちょうど君のようにね。そして目を覚ましたとき、あの子はここがどこか理解していなかった。前いた街でひどい扱いを受けたのかもしれない。錯乱して介抱してくれていた人たちを突き飛ばし、なだ宥めようとした男に、傍にあったはさみ鋏を突き刺したんだ」

そして男は死んだ。その後エルダはあの部屋に閉じこもっているらしい。それが、事のてんまつ顛末だった。

俺は呆然とせざるをえなかった。エルダが何かを気にして外に出たがらないのはわかっていた。けれど、これほど大きな理由があったとは。神が生まれる頃だから、街も十分発展していたはずだ。おそらくエルダにとって、人の死は身近なことではなかった。それなのに、自ら人を殺してしまったのだ。どれほど恐ろしかったことだろう。どれほど自分を憎んだことだろう。

でもな、と老人は言った。

「もう、みんな許しているんだ。あの子が悪意を持ってやったわけじゃないことは、みんな知っている。誰も責めはしない。むしろ、あの子がああやって閉じこもっていることの方が心配だ。無理に引っ張り出しても逆効果だろうから、私たちは待つしかないがね」

しかし言葉とは裏腹に、その瞳には恐怖の色が浮かんでいた。この街の人たちは平和に暮らしている。人殺しの少女を恐れるのは仕方のないことだ。誰もエルダの部屋を訪れないのも、そういうことなのだろう。

でも、と思う。そうして互いに避け合っているのは、何も変わらない。俺はある決意を固めていた。

「わあ、本当に持ってきてくれたの？　ありがとう！」

俺は花のことはよくわからないから、選択はミラさんをお願いした。淡い瑠璃色をした綺麗な花だ。ちょうどこの街の灯りに似ている。中央にいくにつれて白くなり、そこから黒い粒を付けたようなしべが伸びている。花自体は小さいが、何十という数のおかげで、賑やかな美しい花束となっていた。拝借した花瓶にその花を入れて、窓の傍に置く。白い壁に、青い花がよく映えた。

エルダが花に指を触れ、目を細める。何を考えているのかは読み取れなかった。そんな姿を見ながら、俺は声をかける。

「なあエルダ」

「何？」

振り向いたエルダの表情は強張っている。これから出る話題を予期しているのだろう。責められるのかと怯えているのだ。

だから俺は、あえて先のことから話し始めた。

「一緒に、外に出てみないか？」

「えっ？」

エルダは目を瞬いた。多分、相当に驚いている。口が半開きのままだ。

「今日、一年前のことを聞いたよ。でも、お前は反省しているんだろう？　だからずっとここにいるんだろう？　外に出よう。誰も、お前を恨んだりしてはいない。みんな歓迎してくれるさ」

畳み掛けるようにして言う。間違いない。エルダは引け目を感じているのだ。人を殺してしまったことを悔いている。しかし、ずっと閉じこもっていても、その後悔は消えはしないだろう。エルダには街の人たちとの交流が必要だと、俺は思った。それは街の人たちにとっても同じだ。このままでは、どちらも前に進めない。

エルダは目を伏せている。その身体は、わざとらしいほどに震えていた。

「でも……怖いよ。誰かに会うの、怖い」

その気持ちは痛いほどわかる。俺が、民たちに顔向けできないと思うのと同じだろう。自分のせいで他人が死んだのだ。怖くない方がおかしい。それでも、乗り越えるための第一歩を、踏み出さなければならない。

「もう夜だ。みんなが寝静まった頃なら、きっと誰にも会わない。俺がついていってやる」

ついていってやる、というところで、エルダはやっと顔を上げた。まだ、不安そうな表情をしている。視線を逸らしたかと思うと、ぼそぼそと呟く。

「ずっと部屋の中にいたから……きつと、うまく歩けないよ」

「じゃあ、手をつないでやる」

途端、エルダは俺の手をまじまじと見つめた。

「その傷、もう大丈夫なの？」

そういえば。意識していなかったが、もう物を持って痛まない。薬も塗っていないから、本当に治ってきたのだろう。

「大丈夫だ」

微笑んでやると、エルダは今日初めての笑顔を見せた。

「うん！」

それはどこかぎこちない笑みではあったけれど、それでもいいと、俺は思った。

青い街灯に彩られた夜道を、俺とエルダは歩いていた。手をつないで正解だった、

と思う。僅かな段差でつまづ躓くエルダを、度々支えてあげなければならなかった。それでも久々の外の空気は、良い影響を与えたようだ。

「ロウの手、あったかい」

とても楽しそうに、そんなことを言う。

「そうか？」

温度差はあまり感じない。むしろ、エルダの手の方が温かいんじゃないだろうか。

「うん、あったかいよ」

その笑みは照れや喜びというよりも、安堵に近いように思えた。泣いていた子供が母親の腕の中で見せるのに似た、安心しきった表情。最近、こういった人の温かい感情に敏感になったような気がする。

道沿いに並ぶ光り草の植え込みの前で、エルダは立ち止まった。しゃがみ込んで、光を灯した花を一輪、そっと手折る。白い、小さな花だ。花弁全体が、まだほのかに光っている。それを俺の服の胸の辺りに差し込んで、えへへと笑った。

「お守り。双子石とお揃いだよ」

ありがとう、とその小さな花を、潰さないようにそっと触る。こうしているとエルダも普通の女の子らしいな、と思った。花が好きな、普通の少女。当たり前だ。そもそも人を殺してしまったのは、錯乱していたからなのだ。

「ロウは、この街にはもう慣れた？」

笑顔のまま、エルダが静かに訊ねてきた。

そうだな、と答える。

「ここは、いい街だ」

この街は、優しい感情に溢れている。怒鳴ったり争ったりしている人を見たことがない。誰もが慈愛に溢れ、他人を労わりながら生活している。俺も、その温情に生かされたのだ。そんな人々に囲まれているだけで、自分まで優しくなっていくような気さえする。

「そうだね」

呟くエルダは、少し寂しそうだった。やはりまだ気がかりなのだろう。人の命を奪った苦しみは、そう簡単には消えてくれない。それは俺にはどうしようもないことだ。エルダが自分で解決するしかない。

ねえ、とエルダは立ち上がって、まっすぐ俺を見つめた。

「ロウは、わたしと初めて会ったときのこと、覚えてる？」

はあ、と気の抜けた声を出してしまった。急にどうしたのだろう。

「ロウは自分の街のことを話してくれたよね。どうしてお父さんが街に残ったのか、不思議がってた」

そんな話もしたなあ、と俺は思い出す。今思えば、随分と物騒な話を聞かせてしまったものだ。民が死んで、俺を逃がした親父も死んでしまった、なんて、間違ってもエルダのような少女に話すべきではない。何を考えていたのだ、とあの日の俺を叱りつけた気分だ。

エルダはそんな俺の様子に構わず続けた。

「わたし、考えたんだ。ロウのお父さんがロウを逃がした理由——きっとそれはね、その人がロウのお父さんだったからだよ」

「え？」

声を漏らしてから、いつのまにか歩みを止めていたことに気づく。エルダも立ち止まって、こちらを見つめていた。上気した頬がほんのり赤く染まっている。

「だって、家族ってそういうものでしょ？ 街長なんて関係ない。ロウのことが大切だったから、ロウに託したんだよ」

エルダの声は柔らかかった。俺よりずっと年下のはずなのに、母親のような微笑みを浮かべている。

そうなのだろうか。自問しても、答えはわからなかった。でも、そうなのかもしれない。親父は俺に厳しかったけれど、時折見せる優しさがあつた。若いから。理由はそれだけではなかったのかもしれない。そう思うと、心が温まった。

そしてエルダは、少し声を潜めて言った。

「だからね口ウ、わたしは……あなたは、この街を出るべきだと思う」

鋭い刃物の切っ先が、俺に突き刺さった——気がした。得体の知れない苦しみがどつと胸の内を襲って、息ができなくなる。これは一体、何なのだろう。エルダは語気を強める。

「お父さんの遺志を継ぐんでしょ？ 街を取り戻すんでしょ？——だったら、こんなところで立ち止まってる場合じゃないよ」

——唐突に、何を言い出すのだ。

エルダが何を言っているのか、よくわからなかった。考えようとする頭の中で何かが邪魔をする。親父に計算を教えてもらっていた頃のことを思い出した。難しい計算問題を出されて、何回解き直しても正答に辿り着かないときの、混沌に埋もれていくような感覚。今の俺の頭の中は、それに似ていた。

不明瞭な思考の糸を手繰って、なんとか、俺は言いたいことを引っ張り出す。

「エルダ、それは、無理だ」

最初に出てきたのは、否定の言葉だった。一言声に出した途端、するすると口が動き出す。呼吸が落ち着いてきた。冷静さが戻ってくる。

「だってもう、俺の街の民はほとんど残っていないんだ。無謀すぎる。確かに最初は、親父の最後の願いを果たそうと思った。でもよく考えてみれば——それってつまり、復讐ってことだろう？」

そうだ。エルダの言っていることは、ただの復讐なんだ。生き残りを率いて、街を奪った連中に戦いを仕掛けて、それが何になるだろう。意味がないし、馬鹿げている。戦を知らないエルダでも、話せばわかってくれるはずだ。

「復讐なんて、間違ってる」

しかしいつのまにか、エルダは無表情になっていた。呆然としているようにも見える。何かを言おうとして一旦口を開いたものの、声を発することなくまた閉じてしまった。そして数瞬のあと、ぼつりとこぼ零す。

「……そう」

その声は低く、冷え切っていた。思わず息を呑む。けいべつ軽蔑するようなその響きに、俺は恐怖を覚えていた。今日のエルダはおかしい。あのとき俺が街を取り戻すなどと口走ったのは、傷口に塗った薬のせいで思考が麻痺していたからだ。なぜ今になってエルダは、それを蒸し返すのだろう。何を考えているのか、わからない。

感情が顔に出ていたのか、俺を見たエルダははっとして、誤魔化すように笑った。

「ごめん、変なこと言っちゃったね」

久しぶりに外に出て、疲れているのだろう。

「もう休んだ方がいい。帰ろう」

うん、とエルダは素直に頷いた。その表情に、先程までの冷たさは感じられない。

「ねえ口ウ、明日もわたしに付き合ってくれる？」

それは、明日も街を歩くという意味だろうか。自分から外に出る。エルダのその変化が、俺には嬉しかった。エルダを立ち上がらせたのは俺の言葉だ。誰かを救えた。そんな心地よさが、胸の中に広がる。

「ああ、明日も手をつないでやる」

「本当？ じゃあ、明日の朝に迎えに来てね」

「朝でいいのか？」

「うん」

そんな会話をしながら、ゆっくりとした足取りで、エルダと俺は確かに前に進んでいた。

翌朝部屋を訪れると、エルダは寝台の上で、外を眺めていた。何を見ているのか気になって、俺も外に視線を向ける。

そこからは門と、その前にある広場が一望できた。いつもどおり、子供や老人が集まっている。門の傍には、誰も立っていなかった。

「今日は門番、いないんだな」

昨日はいた気がするんだが。彼が休みなら代わりの門番が来ているだろうに、人影は見当たらない。

ふと気づくと、エルダが俺をじっと見つめていた。目を細めて、何か考え込んでいるようだ。

「どうした？」

何でもないと答えるエルダは、どこか元気がないように見える。長い間部屋の中にいたから、昨日の外出でかなり疲れたはずだ。部屋に送り届けて俺が出て行くときには、既に寝息を立てていた。

「今日は外に出るの、やめておくか？」

そう訊くと、エルダは力なく首を横に振った。その様子にも、やはり陰がある。そしてこの部屋自体にも、なんだか違和感があった。何か足りないような気がする。

「大丈夫か？ やっぱり休んだ方がいいんじゃないか？」

「でも、出たいから」

上の空といった風な声。おぼつか覚束ない動作で、エルダが床に足を下ろす。そして俺に向かって、腕を伸ばした。

「足に力が入らないの。ロウ、支えて」

そんな状態で外に出て大丈夫なのだろうか。不安を覚えつつも、両手をエルダに差し伸べる。せっかく自分から外に出る気になったのだ。少し歩いて、辛いようであれば部屋に戻せばいいだろう。

エルダは俺の左手に自分の手を乗せ、立ち上がろうとした。手の平に重みを感じる。俺は両手を差し出したのだから、両方に寄りかかればいいのに。エルダなりの遠慮なのだろうか。

と、次の瞬間、エルダの姿勢が崩れた。足から力が抜けたようだ。つんのめる形で、俺の方に倒れ込んでくる。

尻餅をついて、エルダを受け止める。咄嗟に右手を後ろへ回して、上体を支えた。「エルダ、大丈夫——」

エルダを見下ろして言いかけたとき、視界に青色が映った。違和感の正体を悟って、思わず目を見開く。

寝台の下の青。あれは、昨日俺が持ってきた花だ。剥き出しのまま、隠すようにして床に散らばっている。そして花の隣に、何やら破片のようなものの山が見えた。瞬時に悟る。あれは——割れた、花瓶だ。なぜ、あんなところに？

痛みが、左手を貫いた。

思わず声を上げる。見ると、俺の左手に何かが刺さって、包帯に血がにじ滲んでいった。白い、破片。あの花瓶だ——昨日、俺が持ってきた。

傷を押さえて、身体を丸める。痛い。熱い。指の隙間から、赤い液体が流れるのが見える。その血が殺された俺の民たちを想起させて、どうしようもなく頭が痛んだ。思い出したくない。もう、思い出したくないのに。

誰が刺したのかは、訊くまでもない。

「エルダ……」

ただひたすらに、訳がわからなかった。どうして、という言葉は、自分の耳にも呻き声としか聞こえない。手の痛みと頭痛にさいな苛まれ、床に転がる。

仰向けになったそのとき、立ち上がったエルダの顔が見えた。正確には、その瞳が。はっとして、息を呑む。

「ごめんね、ロウ。でも、もうこうするしかないと思ったの」

初めて会ったときのように、視線が吸い寄せられる。深い青をしたそのそうぼう双眸は、今は燃えるような光を灯していた。そしてその声は、どこまでも強い。それは、ヴィオのことを語ったときの、あの力強さと同じだった。何か眩しいものを感じて、俺は目を細める。日の光を反射した双子石が、きらきらと輝いて見えた。

「わたしは悔しいよ。神様になった、なんて綺麗な言葉で終わらせさせない。あんなのは神じゃなくて、ただの人柱だよ。わたしはこの街を出て、ヴィオを取り戻す」

しんとした部屋に、エルダの声が響く。決意に溢れた言葉。取り戻す、と俺はエルダに言ったのだったか。そんなことが頭をよぎる。

いつのまにか、呻くことも転がることもやめていた。痛みとは違う、強い苦しみが襲ってくる。この苦しみを、俺は覚えている。義務感にも近い、強い思い。俺がやらなければならない。俺が、街を救わなくてはならない。間違いなく、俺が抱いた感情だ。

思い出すのは、青い街に出会う前のこと。

気がつくと、不思議なほどに落ち着いていた。手の平の激痛も、がんがんと鳴る頭も、大したことではないように思える。流れ出す血も、この痛みも、あのときに比べれば何でもない。

「俺は」

声を、絞り出す。

傷を負い衰弱しながらも、俺が求めていたのは、悲劇を乗り越えて平和に暮らす、などという綺麗な終焉ではなかった。俺がこの街に来たのは、そんなことのためではなかった。

そのはずなのに、変わってしまっていた。優しさに吞まれ、傷が治っても街を出ようとは思いつかなかった。けれど。

「俺は、あの街に戻らないといけない。まだ、誰か生きているはずだ。生き残った仲間を集めて、俺はあの街を守らなくちゃいけない」

俺以外の民が全滅したなどと、誰が言った。俺だけが生き残っただなんて、都合のいい考えでしかない。そんなものに囚われていては、本当に大事なものを失ってしまう。たとえ一人であろうと二人であろうと、あの襲撃を生き延びた民がいる限り、俺は諦めるわけにはいかないのだ。

それは、確かに復讐だろう。けれど、馬鹿げてなどいない。俺の生き延びた意味のすべてが、そこにあるのだから。

なぜ今まで忘れていたのか。見上げたエルダはとても強く、美しい笑みを浮かべていた。

「なあ」

窓を開ける。昼下がりの穏やかな風が吹き込んできて、俺とエルダの髪を揺らした。

「神を殺したら、この街、壊れるんだよな？」

白く聳える神殿も、老人と話した広場も、住人たちの暮らしも。この青い光だって、きっと消えるのだ。

俺は躊躇している。確かに、俺は安穏と暮らすためにここに来たのではない。けれど、ここで平和に生活している人々はどうなるのだ。俺のしようとしていることは、略奪者と同じではないのか。

ロウ、とエルダの声がした。

「多分ね、この街の人たちは、思考を操られてるんだよ」

俺の目を覚まさせるために、エルダは俺に取り入り、そして刺した。左手の痛みがなければ、俺は思い出すことはなかつただろう。感謝している。確かに俺は、操られていたのかもしれない。

「わたしが殺してしまったのはね、フィルくんのお父さんだったんだ」

それがあまりにも落ち着いた声だったので、俺は危うく聞き逃すところだった。フィルの父親ということは、つまり。

「ミラさんの、旦那さん？」

エルダは静かに頷いた。

だからフィルは、エルダの名前を聞いて怯えていたのだ。自分の父親を殺した少女を恐れないはずがない。けれどそれでは――

「あの花は……」

俺は、自分の夫を殺した人間への花を、ミラさんに頼んでいたのだ。エルダの名前を出しても、彼女は何も言わなかった。

エルダは青い花を一輪拾い上げて、そっと寝台に置いた。

「許す、ってことみたい。おかしいよね。わたし、その女の人に会ってもいないのに、許す、なんて」

エルダはふふ、と笑った。引きつった、悲しげな笑み。

「誰も、わたしを責めなかったの。なぜ殺したんだ、って。みんな悲しむばかりで、死を乗り越えようとしてた。でも、わたしのことを非難する人は一人もいなかった。そういう風にできてるんだよ、ここの人たちは。わたしは、それが怖くて仕方ないよ。なんで誰もわたしに復讐しないんだろう、なんでわたしはこんなに怖いんだろう、ってずっと思ってた。きっと、双子石のおかげだね」

そう言ってエルダは石を握りしめた。あのときは半信半疑だったが、今なら信じられる。あの双子石には、神の力が宿っているのだ。聞いたことはないが、もしかすると、神は他の神の領域を侵すことができないのかもしれない。

エルダは待っていたのだ。住人たちは決してエルダに凶器になりそうなものは渡さない。だからエルダは、武器を持っていて力のある俺を頼ることにした。門は開かない。街を出るには、神を殺すしかないからだ。

利用されたというのに、俺は不思議と全く腹が立たなかった。むしろ、感謝さえしている。エルダがいなければ、俺はあの老人のように、ずっとここで暮らすことにしていただろう。

「だから、ためら躊躇っちゃ駄目だよ、ロウ。この街は願いを奪ってしまう。本当の目的を忘れてしまう。この街を壊すことは、みんなを助けることにもなるんだよ」

それを信じるしかなかった。神が死んでから街が崩れるまでには、半日から一日かかる。それだけあれば、全員が逃げるができるだろう。食糧を持ち出せば、他の街か旅団が通りかかるまでは生き延びることができる。とりあえず死ぬことはない。俺はそう、自分に言い聞かせた。

日が落ちかけた頃、俺はようやく剣の柄を握った。エルダと共に部屋を出る。一直線に向かうは、街の出口。辺りには人っ子一人いない。なぜなら、今日は休息の日で、民はみな昼頃から神殿の前に集まっているからだ。

門の傍に佇む青年が、今度はちゃんと見えた。あいつだ。昨日は見えなかった門番の姿。あれが、この街の神だ。

青年はこちらに背を向けて、街の外を見ていた。俺たちに気づく様子はない。もしかしたら、気づいていないふりをしているだけなのかもしれないが。

神の戦闘能力についての記録は見たことがない。神が直接戦うのは、敵に攻め込まれた場合だけだ。だが神を持つ街は移動しているので、そうなることは滅多にない。それに、神の力をまともに受けた者は、生きてはいられないと聞く。目撃者が生存していること自体が珍しいのだ。

神はどんな力を持っていてもおかしくない。もしかすると、気づかれた時点で即死してしまうかもしれない。しかし、やるしかないのだ。震える手を抑えて、剣を構える。そしてその背中に刺さんと、駆け出す。

不意に、青年が振り返った。気づかれた——けれど、もう止まれない。声を上げて、剣を突き出す。

驚いたことに、切っ先を前にして、青年は微笑んだ。その胸に、剣が突き刺さる。深く深く、突き刺さる。何の抵抗もなかった。呆気なく、青年はくずおれた。

「どうして……」

エルダが声を漏らした。俺も同じ思いだ。なぜ、気づいたのに迎撃しなかった？ 神が何の力も持っていないとは考えがたい。

青年が微笑んだまま、口を開いた。

「ずっと待っていたから」

「待っていた？」

そう、と頷く青年は、刺されたというのに、少しも苦しげな様子を見せない。

「僕はずっと死にたかった。だから、殺されるのを待っていたんだ」

意味がわからなかった。神が死にたいなどと口にするわけがない。神は民意なのだ

から。この街の人間は、死にたがっているようにはとても見えない。

「あなたが何を言ってるのか、全然わからないんだけど」

エルダが俺の気持ちを代弁してくれる。棘のある口調にも、青年は嫌な顔一つしない。剣の刺さった胸から血が広がって、服を濡らしていく。

「じゃあ、最初から説明しよう。まず初めに——この街は、幻想ではあるけれど、幻ではない」

相変わらずよくわからない。嬉しそうに語り出す青年が、不気味に思えて仕方がなかった。死にかけているはずなのに、笑みを崩さない。

「君は、神の力がどこから来ているか、知っているかい？」

「……民、でしょ？」

怪訝な表情のまま、エルダが答えた。民がいなければ、神は生まれない。そして民がいなくなれば、神は死ぬ。

「そのとおり。ただ、正確には違うね。街は、神の力によって、民の意志どおりに動く。神が古い、民が街を捨てて出て行けば、街は間もなく朽ち果てる。つまり神の力は、民の願いから成っているんだ」

「それがどうした？ そんなことは、誰でも知っている」

俺は苛立っていた。結局こいつは何を言いたいんだ。願いがどうであろうが、願う民がいなければ神は死ぬのだ。どこに違いがあるのかわからなかった。

「僕がかつて、すべての民を失ってしまったことがあるんだよ。生まれ変わった結果が、ここなんだ。これがどういうことか、わかるかい？」

民を失えば神の力も消失する。青年はそう言いはしなかったか。全く矛盾している。

しかしもしかしたら、と思う。本当に願いが神の力になるのだとしたら、当の民がいなくても願いさえ残っていれば、その力が完全に失われるまでは、街は動き続けることが可能なのではないだろうか。

そして青年の次の言葉は、そんな俺の考えを肯定するものだった。

「過去の住民たち。彼らは、神にとある願いを遺して、全員で死ぬ道を選んだんだ」

青年の長い指が、愛おしそうに剣の刃を撫でる。

予想はしていたものの、それは衝撃的だった。殺されたのではなく、全員が自ら死を選んだというのか？ そんなことが、ありうるのだろうか？ 混乱する俺の隣で、いくらか冷静なエルダが、言葉を返す。

「とある願い？」

「そう。決して戦をせず、傷ついた人間を救える、永遠に平和な街になってほしいという願いだ。だからこの街は、願いを持った人間の前に現れる。傷つきながらも、生きたいと強く願った人の元に」

その目は俺たちを通り越して、どこか遠くを見つめているようだった。子供が壮大な夢を語る時のように、青年はここではない場所を見ていた。

「僕が生まれたとき、僕の街は既に四度の神の誕生と四度の戦、そして移住を経験していた。どの街よりも豊かだった自信があるよ。戦を仕掛けてきた街を倒してしまうほどの力もあった。けれど、住民は暗い顔をしていた。このまま暮らしていれば、いずれまた他の街を滅ぼすことになる」

四度というのは破格だ。俺が昔読んだ資料によると、たいていの街は、二度か三度しか神の誕生を見ることはできないらしい。この世界に存在する街はそれほど多くない上、近隣の街は同盟を組んでいる。一度や二度は見知った街を裏切って土地を手に入れることができても、新たに街を見つけることはかなり難しい。よしんば見つけれたとしても、その街の反撃や同盟の街の援護によって、逆に滅亡に追い込まれてしまう古街も多い。俺の街は俺の生まれる数年前に隣街が動き出して去っていったから、格好の標的だったのだろう。

「四度目の移住を終えたときから、街は平和主義に徹していた。どんな街とも、決して戦わない。放浪者は誰でも受け入れる。行商人たちにも好かれていた。最初はそれでよかったんだ。ところが、僕が——神が生まれてしまった。僕だって、神になるつもりなんて全くなかった。むしろ、生まれなくてくれと願っていたくらいだ。大人た

ちはみんな、神の誕生を恐れていたから」

そんな考え方もあるのか、と俺は驚いた。俺は、エルダのように神の家族は悲しむだろうが、大多数の民は神を望んでいると思っていた。けれどよくよく考えれば、神がいても大した利点はないのだ。多少の奇跡があって民が健康でいられることを除いては、むしろ欠点の方が多い。

「神がいる限り、略奪への道は避けては通れない。街は騒然として、解決策を探し始めた。一時期は、僕を殺そうって話になったよ。神を殺せば、すべてが終わるからね」

平和な街でありたい。それは単純でありながら、最も難しい願いだ。相手を殺すか自分たちが死ぬかの選択——後者を、選んだというのか。

震える声で、エルダが訊ねる。

「どうして、そうならなかったの？」

「僕の母親が提案したんだ。神を殺してみんなで死んでも、世界は何も変わらない。それなら、神に未来を託そうって。そしてみんなは、それに賛同した」

答えた青年はそこで初めて顔を曇らせた。怒りとも悲しみともつかない、複雑な表情を浮かべている。

「……あの人は、情に流されたんだよ。僕はもう、息子なんかじゃなかったのに」

それは神が発したとは思えないほど寂しげで、人間的な言葉だった。けれど、その声にはまるで抑揚がない。あらかじめ書かれた文章を読み上げるような、淡々とした口調。目の前の青年はどう見ても人間なのに、目を閉じればそこに人間はいない。これは、人間のふりをした何かだ。エルダは苦しげに顔を歪めた。海色の瞳に動揺が見える。だからその先は、俺が続けた。

「そうしてお前だけが残ったのか。しかしまるで、殺された方がよかったみたいない方だな」

一人で残されるというのは、どれほど寂しいことだろう。周りがみんな死んで、自分だけが死ねない——どれだけ、後を追いたかったことだろう。

青年はいつのまにか笑顔に戻っていた。にこりと微笑んで頷く。

「今でもそう思ってるよ。けれどその理由は、君たちの想像しているようなことじゃない。もっと大きな話なんだ」

「大きな話？」

「住民たちは気づいていなかったのかもしれないけれど、彼らの選択は、神にすべてを押しつけることでしかなかった。神を全能だと信じることで、自分たちに正当性を与えていただけなんだ。勿論、神は全能なんかじゃない。力の源がなければ死んでしまう、少しすごいだけの人間なんだよ」

自嘲するように青年は言う。

「神が殺されると街は崩壊するってことは知っているよね。それは、神の誕生によって、街が神の力に浸食されるせいなんだ。侵食というより、再構成といった方がいいかもしれないね。神の力で街が動くのは、そのおかげなんだから」

初めて聞く考え方だった。考え方というより、神本人が言っているのだから、事実なのだろう。神がいなくなったときに街が崩れるのは、建物が神の力で支えられているからだと教えられたが、違ったのだ。支えられるのではなく、街自体が、神の力となる。

でもね、と青年は続けた。

「神の力は無限ではない。この街を永遠に動かし続けるには、死んでいった民の願いだけじゃ、到底足りなかったんだ。普通の街なら住人がいればそれだけで十分だけれど、この街の人間は、飢えたり他の街に出くわすことがあってはいけぬ。それは戦の原因になるからね。だから食糧の生産は神の力で補助しなければならないし、他の街に見られてもいけない。さらに、僕自身の命も保たなければならない。そのために僕は、別のものから力をもらうことにした。そうせざるをえなかったんだ」

だからこの街には、物見の塔がないのだ。決して戦にならないとわかっているなら、兵を用意する必要もない。内包された畑から大量の作物が採れるのも神の御業。しかしすべての街の神がそんなことができるのなら、そもそもこの世に戦など存在し

ない。

青年が言ったとおり、この街の神は他の神とは違うものから力を得ているのだ。

「別のものって……」

「民自身だよ。僕は民を救うために、民自身を糧にした。気づいていたかもしれないけれど、この街の民は決して怒らないし恨まない。憤怒だとか嫌悪だとか恨みだとか、そういう感情は街に吸収されて、神の力となるんだ」

覚えのある話だった。俺は自分の街を救おうとしていたはずなのに、いつのまにかそれを忘れてしまっていた。広場で出会ったあの老人にしても、ミラさんたちにしてもそうだ。恨みなど持っていないようだった。ただ悲しんで思い出にすることを、乗り越えると表現していただけ。

「君も、今朝は僕の姿が見えなくなっていたね。あのままここで暮らしていれば、君も慈愛に満ちた『普通の住人』になっていた。人殺しの少女を避けこすすれ、手伝おうなんて思わなかったはずだよ。この街の人間は他人を傷つけることなんて決してできないからね」

エルダを怖いと思ったときのことを、まだよく覚えている。俺は自分で言ったことさえ、なかったことにしていた。もし最初からエルダがあんなことを言い出していたら、俺はあの部屋を再び訪れることはなかっただろう。俺がある程度心を開くまで、エルダは待っていたのだ。そしてそれでも、俺はエルダに不信感を覚えた。

神は感情をも奪い、己の力とすることができる。それは恐ろしい話だった。しかしどうも、それだけとは思えない。嫌な予感がした。

「民自身というのは、その感情という意味か？ それだけなのか？」

「勿論、違うよ。民自身を糧にするというのは、その言葉のとおりの意味なんだ」

にこやかに、歌うように、神は言い放った。

「この街の民の身体は、すべて神の力で再構成されている。だから——僕の死、街の崩壊と共に、彼らも消滅するだろう」

殴られたような衝撃が、俺を襲った。街だけでなく、民の体までもを神の力とする。普通の街なら神が死んでも民は無事だが、この街では住人たちまで死んでしまう。そんなことが許されるのだろうか。それでは、ここは街ではなく、神そのものではないか。民を救うために民を犠牲にする。本末転倒だ。そしてこいつは神ではない、ただの怪物だ。

「それって……」

俺は呆然として呟いた。俺は神を刺した。それは、優しくしてくれたあの人々を殺すことと同義なのだ。こいつが死ぬと同時に、ミラさんも、フィルも、老人も、消えてなくなってしまう。俺が住人たちの生活を壊してでも神を殺そうと思ったのは、それが彼らのためにもなると信じたからだ。けれど、それは全くの間違いだ。俺はただ、自分とエルダのために、街の人たちを殺すのだ。

罪悪感が波のように押し寄せてくる。しかし同時に、じゃあどうすればよかったんだ、言いたくなかった。あのままここで暮らしていればよかったのか。その間にも街は人々を取り込んで、願いを奪い続ける。何が正しかったのか、俺にはわからない。けれど、たとえ正しくなくても、俺は立ち止まるわけにはいかないのだ。この決意を、もう誰にも奪わせはしない。

この期に及んでも、神は笑っていた。横たわったまま、穏やかに笑っていた。

「さて、そろそろさよならだ。僕は本当に感謝しているんだ。何度か自分を殺そうとしてみたんだけどね、無理だった。神が死ぬには、寿命か、誰かに殺されるしかないみたいだ。だから、ありがとう。こんなこと、もう続けたくなかった。もうすぐ、僕は死ぬ。この紛い物の平和な街も消えるんだ。そして、君たちだけが生き残る」

神は本当に死にかけているように見えた。剣が刺さったままの胸からは既におびただ夥しい量の血が流れ、呼吸も弱まってきている。

ねえ、とエルダが絞り出したような声で言った。

「最後に一つ、訊いてもいい？」

「いいよ。何？」

青年は、質問を予期していたかのようなようだった。

「あなたは、もう息子さんかじゃなかった、って言ったよね。それって、神になった途端、お母さんへの感情は、すべてなくなってしまったということなの？ 神になるって、そういうことなの？」

いつもの冷静さが崩れた必死の声。多分、ずっと堪えていたのだろう。ずっと考えていたのだろう。弟を救いたいと願ったエルダは、けれど彼がもう人間ではないことをちゃんと知っていた。自分の街に辿り着いても、そこにいるのはもうヴィオではないかもしれない。だから今、訊かずにはいられないのだ。弟と同じく、神になってしまった人間である青年に。

俺は内心冷や冷やしていた。この青年が既に人間としての心を失っているのなら、きっとその残酷な事実を包み隠さず話してしまう。それでエルダが傷つくのを、見たくなかった。しかしここで止めれば、一生恨まれるだろう。

青年は、笑わなかった。

「――僕は、そうだったね」

でも、と続ける。

「もし彼が僕と同じなら、その石はとうに力を失っているだろう」

エルダの表情が明るくなる。その手の中で、双子石が輝くのが見えた。あの石が効力を失っていないということは、ヴィオがまだ人間であるということの証なのだ。

すべてを話し終えて満足したのか、青年はそれきり喋らなかつた。そして、神は目を閉じる。動かなくなる。死ぬのだ。剣で心臓を貫かれて、それでも何事もなかつたかのように語っていた神。それでも、死は避けられない。結局、神の力を以てしても、世界は何も変わらないのだ。そう思うと、たまらなく虚しい気分が襲われる。この青年も、そんな風に考えたことはないのだろうか。

不意に、聞こえてくる話し声に気がついた。俺とエルダは、思わず振り返った。振り返ってしまった。

休息の日の儀式は、日暮れ頃には終わる。住人たちが帰ってきたのだ。門前の広場に向かって、大勢歩いてくるのが見える。先頭の辺りを歩く数人が、俺たちに気づいたようだ。首を傾げながら、こちらにやってくる。彼らには門番の姿が見えないから、俺たちがなぜここにいるのか不思議なのだろう。そして俺は、その中にフィルがいるのを見た。来るな、と止める間もない。

フィルは手を振りながら駆け寄ってこようとしたが、途中で立ち止まって、目を見開いた。見えているのだ。この、血にまみれて横たわった神の姿が。だから、怯えている。

凍りついたフィルから、俺は視線を外すことができない。

肉体も精神も、神によって作られたもの。それは、人間と呼べるのだろうか。俺の手は、フィルを思い出していた。あの日、俺の手を引いたフィルの手は、雪のように冷たかった。今ああやって浮かべている表情も、あの屈託のない笑みも、すべて作り物だったのだろうか。

答えは否だ。誰が何と言おうと、俺がこの街で出会った人たちは、間違いなく人間だった。つないだ手は偽物でも、あの笑顔は決して作られたものなどではなかつた。俺やエルダと、何も変わらない。

フィルは今にも泣き出しそうな顔をしている。堪え切れなくなって、俺は駆け寄ろうとした。もうすぐ消えてしまうことは理解している。俺のせいだ。しかしそれでも、傍にいてやりたいと思った。何が起きているのか、フィルはわかっていないだろうけれど、とにかくごめんと謝りたい。

しかし一歩踏み出した瞬間、その小さな姿が青く染まった。

景色のすべてがぼやける。あの青い光が視界を埋め尽くして、目が眩んだように感じた。そして、その光までもが揺れ消える。ろうそく蠟燭の火を吹き消したときのような、それは一瞬の出来事。その間に、俺は街のすべてを感じた。沈みゆく夕日、夜を感じて輝き出す光り草、子をあやす母親、広場で遊ぶ子供たち、人々の笑い合う声。それらを凝縮した青は、最後に叫ぶように一際強く輝いたかと思うと、急速に集束し、闇に吞まれていった。もう何も聞こえない。エルダの姿はおろか、自分の手さえ見えない。

からん、と地面に落ちた剣が音を立てる。それが終わりの合図だったようだ。真っ暗だった視界が、徐々に色を帯びてくる。足元で草が揺れるのを感じた。耳元で風の音がする。

そこは、小高い丘の上だった。吹き渡る風が頬を撫でていく。夕焼けの色を帯びて、エルダの黒髪が美しくなび靡く。

そこから、巨大な街が見渡せた。いや、街だったものと言った方が正しいか。それは、随分前に滅びた街のようだった。大樹のような神殿は黒ずみ、天辺が欠け落ちている。道の舗装もひび割れ、あらゆる建物が植物のつる蔓に覆われている。昔はかなり栄えた街だったのだろう。

みるみるうちに日が沈んだ。風が冷たさを帯び、小月が姿を現す。

ぼつり、と滅んだ街に一点、光が灯った。続いて一つ、また一つと光の点が増えていく。

光り草だった。街を覆った光り草が、淡く輝いている。

それは勿論、あの青い輝きには到底及ばないが、確かに、あの街だった。怪物と化した神の原点。あの街は彼の作り出した幻想だった。けれど幻想だったからこそ、俺たちは今ここにいる。沢山の人たちの、犠牲の上に立って。

「……街が、見えるわ」

隣でエルダが呟くのが聞こえて、顔を上げた。

地平線に、光があった。色とりどりの光に包まれた、生きている街。それがゆっくと、しかし確実にこちらへと向かってきている。

「……行こう」

彼方に見えるあの街が、突然の来訪者を受け入れてくれるとは限らない。けれど、俺たちは進まなければならない。そのために、幻想の街を壊したのだ。

「うん」

エルダが頷いた。その足が震えているのが見える。気づかないふりをして、俺は剣を持っていない左手を差し出した。その上に、エルダが手を重ねる。

ずきりと傷が、痛む。この痛みを、俺はもう忘れることはないだろう。忘れないまま、乗り越えないまま、ずっと生きていく。

そうして踏み出した俺の胸元で、光り草の花が微笑むように輝いた。

[戻る](#)